

脳と才能

連載第10回
酒井 邦嘉
東京大学教授・言語脳科学者

「音楽 — それは生命のこぼれ」

『愛に生きる — 才能は生まれつきでない』 p.169
(講談社現代新書、1966年)より

鈴木鎮一先生のお言葉を紹介しながら、その奥義おくぎを科学で考えるという連載です。才能教育研究会がめざす「才能」には、どのような意味が込められているのでしょうか。そしてその才能は、脳のどんな働きに支えられているのでしょうか。

コロナ禍で私たちの生活は大きく変わりました。教育界でもその影響は計り知れません。例えば学校の音楽の授業では、飛沫ひまつの拡散防止のため、歌唱や管楽器の演奏が制限されるということまで起こっています。声や音を出さずにリズムをとるだけでは音楽になりませんから、何とか知恵を絞って、オンラインなどを活用する必要があります。先日、数十人のオンライン合奏に参加したことがありましたが（私はヴァイオリンで）、指揮をしっかりと見ることができれば、少なくとも合奏の一体感を味わうことができました。アンサンブルで自分の演奏するパートのみを抜いた「マイ

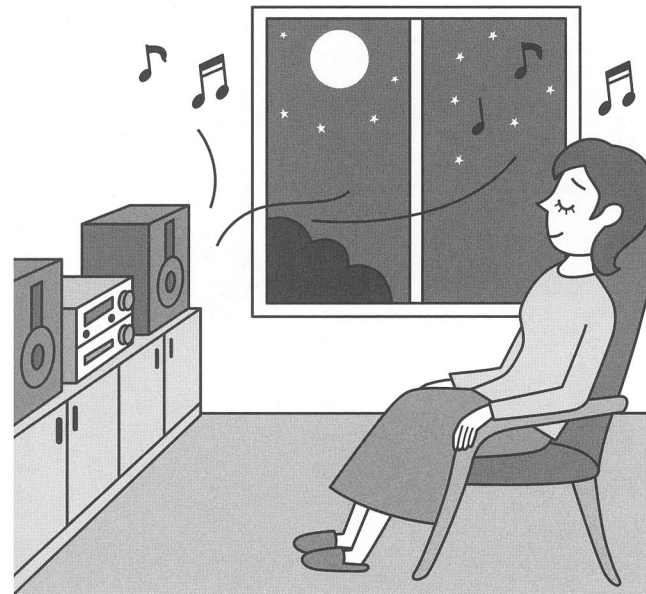
ナスワン」の音源は、オンライン授業やレッスンに活かせることでしょう。市販のカラオケCDもありますし（例えばペータース社は、Music Partner というシリーズを出しています）、YouTube でもそうした演奏が増えてきていますが、もしなければ自作すれば良いわけです。「必要は発明の母」というわけですね。

このような時代だからこそ、音楽は決して「不要不急」の対象ではなく、本当に必要な糧かてであるということが浮き彫りになって来たと言えます。鈴木先生は、「人類は、ことばと文字という文化を創造すると同時に、音楽という素晴らしい文化をつくりました。

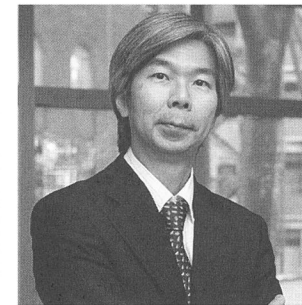
それは、ことばや文字を越えた生命のこぼれ——神秘というべき生きた芸術です」（同 p.170）と書いています。音楽が血の通ったことばであり、生命と同じようにかげがえのないものだと思信する人々が、あらゆる逆境を越えて音楽という文化遺産を次世代に伝えていくのだと思います。

◇

ベルリンにあるフンボルト大学の創始者であり、言語学者のヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767-1835）は、次のように述べています。「言語というものは、教え得るものではなくて、人の心の中に喚び起こすことができるだけなのである。言語を教えよう



お気に入りの演奏をリピート再生すると、時間がゆったりと流れていきます



酒井邦嘉（さかいくによし）
1992年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士。専門は言語脳科学で、人間に固有の脳機能をイメージング法などで研究している。著書に『言語の脳科学』『科学者という仕事』『科学という考え方』（中公新書）、『脳の言語地図』『ことばの冒険』『脳の冒険』（明治書院）、『脳を創る読書』『考える教室』（実業の日本社）、『芸術を創る脳』（東京大学出版会）、『チョムスキーと言語脳科学』（インターナショナル新書）。

とするときは、このように導きの糸を与えることだけが我々にできるのであって、後は言語がこの筋に沿っておのずから展開していくものである。〔中略〕言語は個人個人がみずから創り出したものでもあることになる」〔フンボルト著（亀山健吉訳）『言語と精神—カヴィ語研究序説』 p.63〕。フンボルトはベートーヴェンと同じ時代に生き、『歓喜の歌』で有名な詩人のフリードリヒ・フォン・シラー（1759-1805）とも親交があったそうです。

このフンボルトの一節にある「言語」を「音楽」に置き換えてみると、人間の脳が生み出す音楽の本質が明快にな

ると私は考えています。確かに鈴木先生も、「みんな、教えることだけに夢中になって、育つという子どもの生命の実体を忘れていて、そして、どうしたら能力が身につくかということについて深く追求しなかった。つまり、教育の教ばかり行なって、目的であるところの育のほうを忘れてしまった、ということです」（同 p.172）と書かれていました。「人の心の中に喚び起こす」ことこそ、「育くむ」ということですし、このような意味での共通点を考えれば、音楽はまさに「生命のこぼれ」なのです。

◇

長く日本財団の仕事をご一

緒させていただいた金子務先生と、義母を、昨年末に立て続けに亡くしました。コロナ禍でどちらも家族葬となり、知人にも会えず読経も聞けぬまま、心の整理に時間が一層かかりました。そんな中、私はフォーレの「レクイエム」（フィリップ・ヘレヴェツへ指揮の1988年版）を、家内はヘンデルのアリア「涙の流れるままに（Lascia chio pianga）」（森麻季さんのソプラノ独唱）を、繰り返し聴いて過ごしました。悲しみや満たされぬ思いを浄化し、前を向くように背中を押してくれる音楽は、一人ひとりの心に寄り添う「生命のこぼれ」なのだと思えました。